

特集

QQ CASES COLLECTION

100人の救急医が経験した、100例（以上）の印象的な症例。
本誌2024年6月号・7月号の特集では、垂涎の救急症例集をお届けします。

本誌でも不定期に掲載している症例報告を読んだり、学術集会でのケースレポートなどを聞いていると、結局は“症例”という経験にこそ、学術的意義の大小にかかわらず、本誌で伝えていきたい救急医学・救急医療の魅力、楽しさ、難しさ、そして学びが詰まっているのではないかと感じるときがあります。だからきっと、本誌読者の皆様も「もっとたくさん症例読みたい…」と
思っているはず…。

だったら、もう、そういう特集号を作っちゃえばいいじゃないか！
10や20でなく、100人分の症例を載せちゃえばいいじゃないか！
それが、今回の特集“QQ CASES COLLECTION 100”です。

今回、執筆者の先生方には、必ずしも学術論文・発表としての「症例報告」の形式にとらわれず、ある種のエピソードトークや思い出話も含めて、多様な意味で自身の印象に残っている“症例”をお寄せいただきました。

その広い意味での“症例”には、救急医がその時代・その場所の、限られた時間・条件のなかで、“いつ何をみて、何を感じ、何を考え、何をどのようにしたか”が凝縮されています。思い切っていえば、それこそが救急医療・救急医学の真髄であり、そして救急医の凄みなのではないのでしょうか。そして、それを追体験できることが、症例を読む醍醐味であるはずですよ。

ぜひ、この貴重なCASES COLLECTIONを読んで、救急医が“いつ何をみて、何を感じ、何を考え、何をどのようにしたか”，追体験してください。

今号では特集のPART 1として、50人分の症例をお届けいたします。
来月号も、お楽しみに。